

# 周辺を打ち欠いた土偶

成田 滋彦（青森県埋蔵文化財調査センター）

## 1. はじめに

平成20年12月に秋田県鹿角市に所在する大湯ストーンサークル館で、大湯環状列石出土の土偶を実見する機会があった。その際に周辺を打ち欠いた土偶を発見し、今回「周辺を打ち欠いた土偶」というタイトルで土偶2点を紹介する。

土偶破損の研究については、土偶を破損したものであるという破壊説と、自然に壊れたという非破壊説に分かれる。特に非破壊説を主導する金子昭彦は『…土偶祭式説の前提となる土偶破壊説が証明されたものではないということである。明らかに壊された土偶はない…』（金子2001）と非破壊説を主張しているが、この論は今回の資料を提示して土偶非破壊説に疑問を投げかけるものである。

## 2. 出土状態（図1・2）

今回紹介する土偶は、特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（11）（鹿角市1995）に報告されているものである。土偶の出土状態はD6区の遺構外から出土しており、図2-1はZE-94グリッドIIIaからc層、図2-2はZG-93グリッドIII A層<sup>(1)</sup>と注記がみられる。なお図1で土偶の出土位置をドットで図示した。万座環状列石の東側に位置し、第III層中から出土した。大湯浮石層から地山直上の暗



1 伊勢堂岳遺跡 2 大湯環状列石  
図は大湯環状列石発掘調査報告（11）から引用

● 土偶出土位置

図1 遺跡及び土偶出土位置図

褐色土層で、縄文時代包含層の安定した層位であると理解する。なお、紹介の土偶は報告書の記載から判断して、特異な出土状態は呈していないと思われる。

### 3. 土偶の様相（図2）

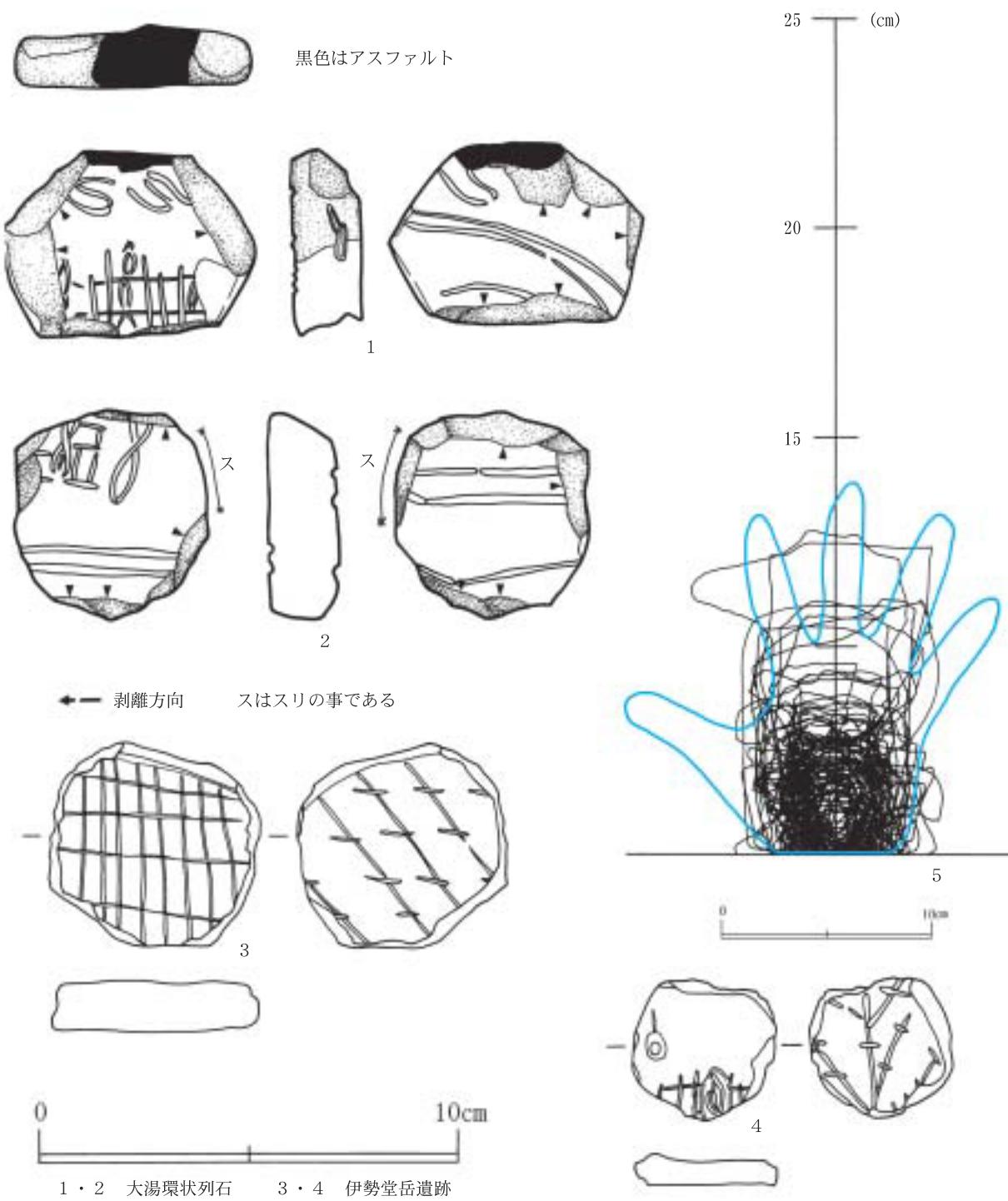


図2 周辺を打ち欠いた土偶・投影図

2個の土偶について記載する。図2-1は、土偶胸部の土偶であり、焼成は良好である。色調は褐色で黒斑がみられる。首部にはアスファルトの痕跡があり、周辺の打ち欠きは側縁部の一部を残して、両面から剥離調整をおこなっている。このことから、首部には打ち欠きをせずに両腕部と胸部下半を打ち欠いている。文様は首部の下位に横位に展開する波状文を施文しており、青森市三内遺跡の出土土偶（成田1984）と文様が類似している。残存部位は長さ6cm・幅4.4cm・厚さ1.7cmを測る。

図2-2は、臍部下半の土偶であり焼成は良好である。色調は褐色を呈している。剥離は周辺部を両面からの剥離調整をおこなっている。なお、側縁部には剥離後にスリの痕跡が確認された。残存部位は長さ5cm・幅4.5cm・厚さ1.6cmを測る。

なお、両土偶ともに土偶の製作には、粘土板を用いた二枚重ねで製作しており、混入物には砂礫を含む。図2-1は白色の石英を混入しており、混入物の差異から1・2の土偶は別々に製作したと考えられる。

この周辺を打ち欠く行為は、土器を用いて周辺を打ち欠く土器片利用土製品<sup>(2)</sup>と共通するものである。このような周辺を打ち欠く形態は、秋田県伊勢堂岱遺跡（秋田県1999）ですでに指摘されていたが、注目されることはなかった。なお、当該時期に制作された切断蓋付土器（壺形の土器を切り離して制作）も、土器を壊すという行為であり、土偶の用途と関連があることが充分に考えられる。

#### 4. 壊される土偶（図3）

本論では土偶の用途について若干まとめたいと思う。図3は大湯環状列石の土偶を投影したものである。この投影図から5～6cmの小さなグループと15cm内外の大きなグループの二つに分けることが可能である。特に小さなグループは手のひらの窪みと同一であり、今回の資料も手のひらの窪みサイズの小さなグループの範疇に入るるものである。小さなグループは土偶の一部分をのこし、他の部位はすべて粉砕するのであり、その過程は土偶本体を殺し、徹底的に葬るものであり一定の大きさの段階で祭式<sup>(3)</sup>は終了するものと考えられる。このような一連の祭式を、どこに求めるかはイエンゼンがインドネシアのセラム島西部のヴェマーレ族から採集した。ハイヌヴェレイ型神話に求めることが可能である。ハイヌヴェレイ神話を要約<sup>(4)</sup>すると、彼アメタはヤシの実を台の上に置いたところ夢の中で、ヤシの実を地中に埋めなさいと告げられ、ヤシの実を埋めたところ、ヤシの実は三日後に成長しヤシの花から一人の人間が表れ、彼はその娘を家に持ち帰り、ハイヌヴェレイ（ココヤシの枝）と名付けた。彼女は三日後には娘となった。この娘は用便をすると貴重な物を出したため、彼は金持ちとなった。その後、村人に珊瑚・陶磁器類を村人の要求に求めて与えたが、逆に村人はハイヌヴェレイに対して、不気味さと嫉妬を感じ彼女を殺し生き埋めにした。ハイヌヴェレイの死を知った彼アメタは、嘆き悲しみ彼女の死体を切りぎざんで広場の周囲に分けて埋葬したところ、今までみなかった芋が生えてきて人間たちの主食となったというストーリーである。この神話は南太平洋一帯・アメリカのミシシッピー川流域に広まっており、吉田敦彦（吉田1986）が日本の古事記オオゲツヒメ神話及び日本書紀のウケモチ神話にみられる体のあらゆる穴から穀物をだし、最終的に殺されるもので、ハイヌヴェレイ神話と共に通するものであると指摘している。つまり、神話に表れる神はすべて女性であり、土偶がすべて女性であることから女神の可能性がたかいと思われる。この女神説に関しては、古くは鳥居龍蔵が「日本石器時代民衆の女神信仰」（鳥居1922）で土偶女神説を発表している。その後、藤森

栄一は「生殺与奪の女神」(藤森1970)であると指摘されており、地母神信仰と強い関連をもつものである。

## 5. おわりに

今回の2点の資料は、土偶を意識的に打ち欠いたものであるという点、土器の周辺を打ち欠いた土器片利用土製品と共に通する点、さらに切断蓋付土器と類似した面をもつ点を指摘し、用途についてはハイヌヴェレイ型神話と関連があり、従来から指摘されている地母神信仰と土偶の関連が強いといえる。

文末ではありますが、資料の実見に関して鹿角市教育委員会秋元信夫氏、大湯ストーンサークル館の藤井安之氏・三浦貴子氏にお世話になりました記して感謝いたします。

## 註

- (1) 図2-2は、報告書でグリッドを記していないため、土偶に注記されているグリッド名を採用した。
- (2) 土器片利用土製品は、円板状土製品・円盤状土製品等と報告書で名称が付されているが、粘土で用いた土製品と混乱するので、あえて土器片を打ち欠いて制作しているものを、「土器片利用土製品」と名称を付すべきであると提唱したい。
- (3) 一定の段階まで土偶を破壊し、最終段階に至るまでの行為を祭式として表現する。
- (4) アードルフ・E・イエンゼンの『殺された女神』(1977)の54~58頁に記載されている神話の文書を要約したものである。

## 引用・参考文献

- 秋田県教育委員会 (1999) 「伊勢堂岱遺跡」秋田県文化財調査報告書第293集  
アードルフ・E・イエンゼン (1977) 「殺された女神」『人類学ゼミナール2』弘文堂  
鹿角市教育委員会 (1995) 「特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(11)」鹿角市文化財調査資料52  
金子昭彦 (2001) 『遮光器土偶と縄文社会』同成社  
鳥居龍藏 (1922) 「日本石器時代民衆の女神信仰」東京人類学雑誌37-11  
成田滋彦 (1984) 「青森市三内の採集土偶について」遺址第4号  
藤森栄一 (1970) 『縄文農耕』学生社  
吉田敦彦 (1986) 『縄文土偶の神話学』名著刊行会